



愛知県名古屋市中区にある名古屋城。一六〇〇年代初頭、徳川家康の命で諸大名が築く。一九五九年、外観復元。天守の金の鯱（しやちほこ）から「金城」と呼ばれた。山口博之／アフロ

方言、この身近で かつ遠い存在、 あるいは 名古屋弁の複雑性

水野太貴 (ゆる言語学ラジオ)

YouTubeチャンネル「ゆる言語学ラジオ」の話し手、水野太貴の興味の対象のひとつが方言。方言とは言語においてどういう存在なのか？無限にも思えるバリエーションが生まれるのはなぜ？またここにもひとつ、言語学の深く楽しい沼があった!!

か、などが調査されています。

——方言に定義はあるのでしょうか？

水野 方言の定義は意思の疎通と地理的な連続性です。東京の人が青森弁を聞いたとき、たぶん理解できないと思います。それでも岩手↓宮城↓福島↓茨城↓千葉↓東京と地理的な連続性はある。青森と東京では言葉でのダイレクトな意思疎通はできないにしても、二カ所は地理的に分断されているわけではありません。

——代表的な方言研究ではどこにポイントが置かれるのでしょうか？

水野 方言をどう考え、どう分析するかは研究者によって違います。

ひとつが方言地理学。大西拓一郎先生の『ことばの地理学 方言はなぜそこにあるのか』（大修館書店）などで方言と場所の関係性について知ることができます。

方言の分布の研究や、テンス（時制）やアスペクト（動作がどの段階にあるのかを表す文法形式）の研究もあります。独特のテンス表現、アスペクト表現を方言はもっている。

方言ごとのコミュニケーション行動の研究もおもしろい。小林隆先生、澤村美幸先生の『ものの言いかた西東』（岩波新書）では、たとえばお金を借りたときの感謝の言葉についての調査

方言研究のバリエーション

——今回の特集で水野さんからいろいろな話を聞くなか、現在の関心のひとつが方言にあると知りました。言語学において方言の研究はどのような意味合いをもつのでしょうか？

水野 方言研究は言語学のひとつのジャンルで

結果を読むことができます。「ありがとう」「おおきに」や東北地方でよく使われる「どうも」などの感謝を表す言葉、それに準じるものとして「申し訳ない」「すまない」などの恐縮を表す言葉がどう使われるか……。両方を言う地域もあれば、両方を言わない地域もある。地域によって、感謝の言葉の使われかたが違う。

東京方言がたまたま標準語になった

——話が戻りますが、方言の研究は国が主体だった？ 国としての目的があったのでしょうか？

水野 最大の目的は標準語を制定することだったようです。

——水野さんの方言への関心のポイントは？

水野 そもそも日本語のテンスとアスペクトの体系が他の言語と比べても独特で、それを知ったときにまず驚きがありました。さらにそれが方言のなかでさらに多様な表現をもっているというところですね。

標準語をなんとなく絶対的な存在だと思ってしまいがちですが、いちばん栄えていた東京の方言がベースになったものという事です。もちろん、いろいろな調査の結果、使いやすい言葉が選ばれていったというのはあると思います。



大西拓一郎「ことばの地理学 方言はなぜそこにあるのか」(大修館書店)。ある言葉とそれが使われる場所との関係性を考える。



小林隆、澤村美幸「ものの言いかた西東」(岩波新書)。金を借りたときになんと違う？ じつは地域による差がある。

言語について考えるとき、話者の数（言語人口）であるとか、マジョリティとマイノリティの問題が出てきますが、マジョリティが優れているわけではない。自分がしゃべっている言葉にしても、生まれ落ちた環境ではたまたまその方言がマジョリティであっただけで、何の疑いもなく使っていたということですね。

東西対立の狭間に位置する名古屋弁

——水野さんは愛知県の出身ですね。

水野 はい。それで、東京に来ると、東京方言、東京式のアクセントしかわからない人が一定数いることを知ったわけです。なかには、方言に憧れをもっている人もいます。

——東京方言は標準語とイコールではないわけですね。

水野 そうですね。東京方言といっても、山の

手言葉だとか多摩方言、それから「べらんめえ口調」でおなじみの江戸方言などさまざまです。標準語は明治維新後に山の手言葉をもとにつくられているので、厳密には東京方言とは違いますが、

名古屋弁っていじられるんですよ、すごく。

「どうせみやーみやー言ってるんでしょ？」と好奇のまなざしを向けられたり。ある日「このやかん、ちんちんだね」と言ったら、白い目で見られましたからね。「ちんちん」は今でこそ名古屋方言とされますが、かつては熱いものを指すために広く使われたオノマトペなのに！ 僕としては別にいじられるのはそんなに嫌でもないので、受け入れていました。でも、名古屋弁について語れるぐらい、詳しくになりたいなと思っていたときに、あるイベントで名古屋弁について話をしてほしいという連絡をもらったんです。

僕自身はただの名古屋弁話者でしかないので、